

理解することにとことんこだわる

「先生、この問題と、この問題がわかりません。」—Y君である。授業直前であり、授業後も私には他の授業が入っているため後日に解説を渡すということでもよいか伺うと、「大丈夫です！」と、気持ちよく応えてくれる。次の授業日の授業前に説明しながら解説を書いた紙を渡すと、「ああ、分かりました！」と、スッキリした顔になり、本当に理解してくれたことがこちらにもはっきり読み取れた。

Y君は中3半ばになってからよく質問に来るようになった。彼が質問してくるのは、塾の数学ワーク「ステップ」の中のかかなり難しい応用問題で、全員には宿題にせず「やれる子は是非挑戦してみるように。」と言い渡しておいたものや数学プリント内の難問に関することが主だったが、時には複雑な理科、社会、国語にも及ぶことがあった。ある時など「学校の先生の説明ではよく分からなかったの・・・。」と、学校でやった問題に関しても聞いてくることがあった。どうやら学校でもよく質問していたらしい。授業中でも先生の説明に対し、「その意味がわかりません。」と、はっきり伝える。他の子もわかっているわけではない。ほとんどの子がわからないままでもそのままやり過ごそうとしていたときの発言だけに、クラスメイトからは「Yはすごい。」と一目置かれていた。授業態度を評価してもらおうと思って聞いたことではない。むしろ先生によっては心証を害される可能性も全く無いとは言い切れないのである。それでも聞かずにいられなかったのは、彼の中で“はっきり理解しないまま進める”ことが気持ち悪くてできなくなっていたからである。塾に入り、中1、中2、中3と授業を受けてきて、数学の式も英語の文も全て論理的に説明できることを学んだ。そして、それを自分の中でも実践しようとし続けてきた。数学や理科の難問でもワークの解説を見れば式も答えも書いてある。英語の長文も日本語訳がついている。しかし、そういったものは途中の式を飛ばしてあったり、直訳ではなく意識に走りすぎて、子どもにとっては理解しづらいものが多々あるのである。理解しようとする時間がかかる。式の意味がはっきりわからなくても、文法的にしっかり理解出来なくても、あいまいなままにおいてやり過ごすことは可能なのである。私にバレることもない。しかし、彼はそうとはせずに理解出来るまでとことんこだわり、自分で調べられることは調べ、どうしてもすっきりしなかった場合、最後は私に質問してきちんと解決してきた。それを繰り返してきたからこそ、3年間で驚くほど力を伸ばしたのである。

内申34からのスタート。最後は42まで伸ばし、今は笑顔で千種高校に通っている。